

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) いちごの管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いちごの管理 ○露地野菜の定植準備 ○そらまめの今後の管理 ○たまねぎの最終追肥と防除 <p>3月下旬になると、気温や日射量の増大に伴ってハウス内の温度が上昇し、果実の軟化等の品質低下が起りやすくなる。また、吸水量が増加するため、水管理が重要となる。</p> <p>ア 温度管理</p> <p>この時期は気温の変動が激しいため、天気を見ながら適切な温度管理に努める。換気扇のあるハウスでも、晴天時には30℃を越えることがあるため、適宜サイドを開放し、温度が上がりすぎるのを防ぐ。</p> <p>また、夜間の冷込みが予想される日には、夕方早めにハウスを閉め、保温を心がける。</p> <p>イ 追肥とかん水</p> <p>[土耕栽培]</p> <p>地温の上昇に伴い肥効が高まるため、施肥量が多くなると草勢が強くなり、乱形果や障害果が発生しやすい。追肥は草勢や葉色を見ながら少量ずつ施用するとともに、果実の軟化を防ぐため、かん水は収穫後の午前中に行うようにする。</p> <p>[高設栽培]</p> <p>気温の上昇に伴い株の吸水量が増大するため、水分不足にならないよう、必ず排水量を確認しながら給液を行う。培養土によっては、一度乾燥すると水をはじいて湿りにくくなることもあるため、乾燥させないようにする。</p> <p>排水量は給液量の2割を目安とし、給液の回数や量を調節する。また、給液濃度はマニュアルに沿って設定するが、定期的にECやpH値を測定し、異常がないかチェックする。</p>



写真1 いちごの高設栽培

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 露地野菜の定植準備</p>	<p>ウ 収穫 気温が上昇すると、過熟果や果実の傷み等が発生しやすいため、食味を損なわない程度にやや若採りとする。また、できるだけ気温の低い早朝に収穫するとともに、収穫後は予冷を行い、品質保持に努める。</p> <p>エ 病虫害防除等 気温の上昇に伴い、うどんこ病、ハダニ類、アザミウマ類等の発生が多くなる。ほ場をよく観察し、発生密度の低い初期に防除するようにする。薬剤防除だけでなく、ハウス周辺の除草、老化葉や収穫の終わった果梗は早めに除去するなど、耕種的防除を併せて行うと効果的である。</p> <p>3月は菜種梅雨の時期でもあるため、ほ場準備は週間天気予報等に注意して効率的に行う。ポイントは、耕起後に降雨が続くとほ場が乾かず、畝立て等の作業が困難になるため、耕起から畝立てを素早く実施する。</p> <p>ア さといもの植付け 植付け時期は全期マルチ栽培で3月下旬から4月上旬とする。乾燥に弱いため、容易に水が入られるほ場を選択する。また、連作障害を回避するためには3～4年の輪作が必要となる。</p> <p>種芋は病虫害の被害がなく、かぎ口が1つで頂芽が健全な子芋または孫芋で、1個 40～90 g のものを約200 kg/10 a 準備する。病害予防のため種芋消毒を行う。</p> <p>ほ場に堆肥と苦土石灰を施用し、pH を 5.5～6.8 程度に調整しておく。畝幅は 110～120 cm で、植付け深さは種芋の頂芽から地表面までで約 15 cm を確保する。</p> <p>イ 果菜類（トンネル・露地）のほ場準備 4月中下旬に定植する、なす、きゅうり、すいか等の果菜類のトンネル栽培では、3月中にはほ場準備を行っておく。特に土づくりは、3月に雨天が続くことがあるので、前項と同様に、</p> <div data-bbox="922 1102 1390 1514" data-label="Image"> <p>写真2の画像には、健全な種芋と不健全な種芋が写っています。左側の健全な種芋は丸みを帯びており、頂芽が1つだけ見えます。右側の不健全な種芋は変形しており、頂芽が沈んでいたり、切開されているものがあります。赤い円は健全な種芋を、黄色い円は不健全な種芋を指しています。</p> </div> <p>写真2 健全な種芋と不健全な種芋 (左：植付けに適した種芋)</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) そらまめの 今後の管理</p>	<p>堆肥の施用や苦土石灰の散布などの作業を早めに行う。また、耕起後はほ場の周囲に排水溝を必ず整備しておく。</p> <p>今月は気温の上昇とともに生育旺盛となり、開花から着莢開始期を迎える。株元からの腋芽の発生が多くなるので、定期的に取り除く。L字仕立て誘引は、分枝の伸長に合わせて高さ 30 cm ごとに誘引ひもを張り、分枝がぐらつかないように固定する。</p> <p>病害虫の発生が多くなるため、適期に防除する。アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、初期防除を徹底する。赤色斑点病は降雨前の予防散布に努める。</p>
<p>(4) たまねぎの 最終追肥と 防除</p>	<p>県内では貯蔵用の晩生品種の栽培が多い。球の肥大後期まで肥料が吸収されるが、球のチッ素含量が高くなると収穫後に腐敗しやすくなる。このため、最終の追肥は遅くとも3月中旬までに、チッ素成分で約4 kg/10 a とし、貯蔵性の低下を防ぐ。</p> <p>また、たまねぎの主要病害である白色疫病やべと病は、排水不良のほ場で発生が多いため、降雨後は排水溝を補修するとともに早期発見や早期防除を心がける。</p>



写真3 そらまめの誘引
(1条L字整枝)

(作成 農林水産研究所)